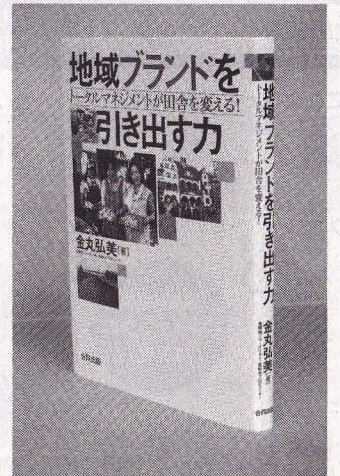


金丸 弘美・著



合同出版＝1470円。
 かなまる・ひろみ＝19
 52年、佐賀県生まれ。食
 環境ジャーナリスト。
 『田舎力 ヒト・夢・カ
 ネが集まる5つの法則』
 など多数。

地域ブランドを引き出す力

地域ではいま、「食」を通じた取り組みが活発になっている。著者はこれを「かっこいい田舎」と表現して、各地の事例を追っている。副題は「トータルマネジメントが田舎を変えられる！」。

驚くのはその取材力で、3年かけて歩いた国内32カ所、海外4カ所からレポートする。テーマを①輝く女性②農のメッセージ③地域の財産④商品のオリジナリティ⑤町づくり⑥プロモーション⑦地産外商⑧の6つに区分。農家や関係者が関心を寄せる内容を次々に紹介していく。

著者が各地の現場をみて考えたことは、「プロデュースの善しあしが、人と地域を元気にする」。関係者にとっては、十分参考になる言葉だ。

例えば、山形県では2005年に始まった「食の甲

書評 営農生活部 竹村 晃

東日本大震災による農業への打撃、世界的な穀物高騰など、日本の食料確保はまさに「内憂外患」。今後の食料の安定確保へ向け、幅広い視点から問題を解きほぐす。

大震災で津波による冠水面積(推計)は2万3600㌔で、このうち水田は2万㌔。全国収量の1%強に相当する11万㌔が打撃を受ける。農林水産政策

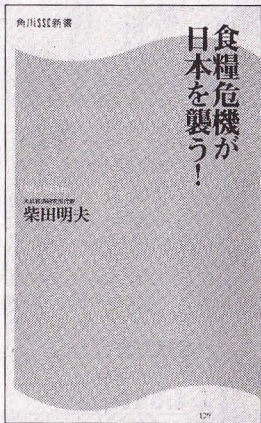
「かっこいい田舎」を追う

子園を取り上げる。高校生が地域の伝統野菜はもちろんな、歴史、文化、栽培法などを調べて、料理に反映させる。コンテストは、すでに全国的にも有名になっている。

この他、コウノトリの生態などを中心とした兵庫県豊岡市での環境教育とスローフード運動、大分県安心院町での農家民泊なども紹介する。

海外の事例として、フランスでの「味覚授業」を紹介する。化学肥料や農薬を大量に使う環境破壊を招いたことを反省して、子どもを対象に本物の味を教える。また、酪農家による農業体験だけでも1400カ所あると言う。

地域活性化はさまざまな手法がある。だが「食」はまさにキーワード。各地の事例を見ると、しっかりした目標、あふれる情熱が見えてくる。読み終えると、地域活性化へ向けた元気が湧いてくる。



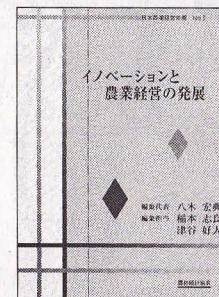
食糧危機が日本を襲う!
 柴田 明夫・著

世界の食料は、今年に入ると穀物だけでなくコーン、ヒエ、砂糖、カカオ豆などが上昇する。農林水産政策

は2割強(実質)上昇する。国際的な穀物高騰の背景には、ロシアなどの異常気

イノベーションと農業経営の発展

八木 宏典・編集代表



技術革新(イノベーション)を農業分野にも積極的に取り入れ、経営を発展させる意義と事例を教える。指摘する技術革新とは、常に経営内部に戦略として打ち立て、採択から結果までの全行程を管理すること。ひとつの生産技術を導入して、結果だけを評価するのは意味が違いう。

事例は全部で13。北海道の土壌研究会(SRU)は、この

土壌中の有機物の分解を促進させるために、稲刈り後、田んぼに落ち葉や稲わらなどを堆肥として施用する。この事例は、農家の経営者から選ばれた。農業家、土壌研究者、農業者、行政関係者、消費者らから選ばれた。この事例は、北海道の土壌研究会(SRU)は、この事例は全部で13。北海道の土壌研究会(SRU)は、この事例は全部で13。

小笠原諸島に学ぶ進化論

清水 善和・著



ユネスコの世界遺産登録が決まった「小笠原諸島」(東京都)の成り立ち、自然生態系などをまとめる。一般向け科学書。

島が誕生したのは1500万年前。さまざまな生物が海を越えて島に到着し、生物は独自の進化を展開した。現在では「東洋のガラパゴス」とも呼ばれている。島を代表する固有種

は、哺乳動物のオオコウモリ鳥のメロイロ科など、日本には見られぬ動物も、東海でも前かがみ状の骨格を有する。この事例は、北海道の土壌研究会(SRU)は、この事例は全部で13。北海道の土壌研究会(SRU)は、この事例は全部で13。

機マナー説を挙げる。

一方、消費面では新興国の消費が増加する。大豆の買い付けでは、日本と中国が競合し、中国が存在感を増している。

深刻な食料難を避けるためにも、日本も国家プロジェクトとして食料戦略を打ち立てる必要性を挙げる。著者は丸紅経済研究所代表。

ラストハン

飯田

イノシシ、鹿、山

静岡県浜松市の穂原氏の、生き物に学ぶ「ラストハン」のノウハウが伝わる。

イノシシの捕獲